

小松地区の歴史(平家落人の地と小松城跡)について

時代	西暦	I : 小松地区の歴史	II : 佐賀の歴史	III : 日本の歴史
弥生時代	紀元前後 250年頃	・有明海沿岸の後退によりこの地に人々が定住し始める。	(紀元前後) ・豪族が小さなクニをつくって、人々を支配するようになった。 (250年頃) ・唐津地方は末蘆国(まつろこく)とよばれて4000戸の家があった。	(紀元前後) ・全国にたくさんのクニができ、中国の漢と交易をする豪族の王たちが生まれた。 (250年頃) ・30ぐらいのクニを納める邪馬台国の女王・卑弥呼が存在した。
大和時代	500年頃		(580年頃) ・佐賀地方は【肥の道の前】といわれ、【サカ】の名もおこった。 (733年頃) ・肥前国も、大宰府によって治められていた。	(538年) ・百濟より仏教が伝わった。 (593年) ・聖徳太子が摂政になった。 (630年) ・遣唐使の派遣がはじまった。 (645年) ・大化の改新がはじまった。 (652年) ・班田や条里制がはじまった。 (701年) ・大宝律令ができた。 (741年) ・国分寺と国分尼寺を国ごとにつくらせることにした。
奈良時代	700年頃		(715年) ・国・郡・郷・里の順序がはっきりし、条里制が発達した。 (733年頃) ・肥前風土記が大宰府でつくられた。 (741年) ・肥前の国分寺と国分尼寺の建立を命じられた。	(710年) ・奈良に都が定まった。 (712年) ・古事記がつけられた。 (720年) ・日本書紀がつけられた。 (741年) ・国分寺と国分尼寺を国ごとにつくらせた。 (752年) ・東大寺の大仏がつけられた。 (759年) ・万葉集ができあがった。
平安時代	800年頃 1185年	・平家が源氏に壇ノ浦にて敗北したので、平家の平重盛を祖とする一部の子孫(落人)は源氏からの逃亡の末、小松の地にたどり着き落ち延びる。	(839年) ・神埼郡空閑地690町が天皇の命令で開かれ、【神埼荘】のもとができた。 (910年) ・荘園や名田が多くなり武士団がつけられた。 (1133年) ・平忠盛が、【神埼荘】で宋の船と貿易をおこなった。 (1167年) ・平清盛が、杵島郡に大功田をあたえられた。 (1186年) ・南二郎季家(すえいえ)が、龍造寺村の地頭となり、竜造寺氏を名のった。	(794年) ・京都(平安京)に都を移した。 (806年) ・天台宗や真言宗がはじまった。 (850年頃) ・藤原氏の勢力が強まった。 (894年) ・遣唐使が廃止された。 (995年) ・藤原道長が政権をにぎった。 (1100年頃) ・武士が政治に登場してきた。 (1167年) ・平清盛が太政大臣になった。 (1185年) ・平家が滅び、源頼朝が各地に守護・地頭をおいた。

時代	西暦	I : 小松地区の歴史	II : 佐賀の歴史	III : 日本の歴史
鎌倉時代	1200年頃		(1195年) ・肥前の武士たちは鎌倉幕府の御家人となり、地頭や鎮西守護所番役をつとめた。	(1192年) ・源頼朝が、鎌倉に幕府をつくり将軍となった。
	1220年頃	・平家の落人は、源氏が滅んだあと北条氏の世になり、小さな祠(ほこら)を建立し、仁徳の高かった平重盛公を小松大明神として祀り、小松社と称し心のよりどころにする。また、小松の平家浮立はここから始まり、平家の存在を鼓舞する祭りができるようになる。	(1226年) ・松浦党の武士団は高麗人から【和寇(わこう)】とおそれられた。 (1274年) ・松浦党・白石・千葉氏など、肥前の武士が元軍と戦った。 (1281年) ・松浦党や龍造寺氏は、舌岐の島で元軍と戦った。 (1333年) ・肥前の御家人の多くは、少弐氏にしたがい、幕府の鎮西探題を攻めた。	(1219年) ・北条氏が執権となって、幕府を支配した。 (1250年頃) ・新しい仏教がひろまった。 (1274年) ・文永の役で元寇を退けた。 (1281年) ・弘安の役で元寇を退けた。 (1333年) ・足利尊氏らに鎌倉幕府がたおされ、後醍醐天皇が親政をしいた。
室町時代	1330年頃	・小松内がクリークを利用した環濠集落として形成されていく。	(1333年) ・天皇と対立した足利尊氏は、九州に来て肥前の武士などの助けもあり、北朝の天皇をたてて戦い、京都へ帰った。	(1336年) ・後醍醐天皇が吉野に移り、南朝となって京都の北朝と対立した。
	1362年頃	・菊池氏(菊池武安)により小松城(別名:蒲田城)が築城される。(クリークを利用した環濠集落的な水城)	(1355年) ・南朝の懐良親王が肥前の国府に入り、少弐氏と戦った。	(1338年) ・足利尊氏が京都に幕府を開いた。
	1377年	菊池武安は牙城としていた仁比山城を少弐氏より攻められ、敗れた武安は支城の姉川に落ちて姉川氏の祖となる。姉川氏はその後少弐氏～龍造寺に仕える。	(1395年) ・今川了俊が九州探題をやめた。 (1478年) ・長州の大内氏のいきおいが肥前にもおよんできた。 (1529年) 龍造寺隆信が肥前・佐嘉水ヶ江城主・龍造寺周家の長男として生まれる。	(1392年) ・南朝方が負けて、天皇が一本(一人)化された。 (1467年) ・応仁の乱がはじまり、戦国大名が各地で争った。 (1470年頃) ・各地で土一揆がおこった。
	1540年頃	・犬塚氏(鎮家・しげいえ)【別名:犬塚弾正・犬塚盛家】により小松城(別名:蒲田城)を修築し、居城する。	(1530年)【田手畷の戦い】 ・田手畷(たでなわて)の戦いで、少弐氏が長州の大内氏を撃退した。 北九州(大宰府)の覇権をめぐり、周防国の大名・大内氏と肥前国の大名・少弐氏との間で起きた戦いです。 大内氏と少弐氏とは、室町時代を通じて北九州(大宰府)の覇権を争う宿敵同士でした。	(1488年) ・一向一揆がおこった。

時代	西暦	Ⅰ：小松地区の歴史	Ⅱ：佐賀の歴史	Ⅲ：日本の歴史
室町時代		<p>・このころの肥前国人にとっては【少弐氏より大きな勢力は大友氏】です。 従いまして、犬塚一族は 大友配下で、少弐配下です。</p>	<p>少弐氏方の諸将(龍造寺氏・馬場氏)が奮戦するが、兵力で劣勢の少弐氏勢は、敗色が濃厚でした。鍋島清久・清房父子らが率いる赤熊奇襲隊の活躍が有って、大内氏軍をを敗走させた。 ここに、鍋島清久の赤熊の伝説が生まれた。 この戦いの後、佐賀平野南部の有力領主らを味方につけて勝利した龍造寺氏が、少弐氏家中での発言力を強め、戦国大名化していく契機となった。 (1543年) 龍造寺隆信の父・周家(ちかいえ)が少弐氏の重臣・馬場頼周によって離反の疑いをきせられ、祖父や父をはじめ一族のほとんどが騙し討ちされた。 生き残った隆信は曾祖父・龍造寺家兼(いえかね)と共に筑後の蒲池氏に亡命します。 (1546年) 龍造寺家兼は蒲池鑑盛の援を受けて挙兵し、馬場頼周を討って龍造氏を再興し、龍造寺隆信が水ヶ江龍造寺の家督を継いだ。 (1547年) 龍造寺隆信は少弐冬尚を攻め、城原の勢福寺城から追放した。 (1548年) 龍造寺本家の当主・胤栄(たねみつ)が亡くなったため、隆信はその未亡人をめとり、本家の家督を継承した。 しかし、隆信は家督継承に不満を持つ家臣たちも少なく、これを抑えるために、当時西国随一の戦国大名であった大内義隆と手を結び、大内氏の力を背景に家臣たちの不満を抑えこんだ。隆信の【隆】は義隆の【隆】を受けて隆信と名乗った。 (1549年)</p>	<p>(1543年) ・ポルトガル人が鉄砲を伝えた。</p> <p>(1549年) ・サビエルがキリスト教を伝えた。</p>
	<p>1559年</p> <p>1560年</p>	<p>・直鳥城の犬塚家清とその嫡男・尚家の親子が大友宗麟の命により筑後の諸將と共に筑前侍島の筑紫惟門を攻め、共に宝満岳で戦死する。この結果、尚家の実弟である小松城主の鎮家(しげいえ)が直鳥城の家督を継いだ。</p> <p>・この時点で、小松城(別名：蒲田城)が城としての機能が失われたと思われる。(廃城となる。) 後年、鎮家は西犬塚の蒲田江城の所領をも相続して、蒲田江城に居住するようになります。 当時は東犬塚家(崎村城)だけでなく、犬塚一族全体が大友配下で、少弐配下でした。 故に、従来通り大友配下として、当時敵対していたという龍造寺氏とは対峙していました。 しかし、この頃から、少弐氏配下にあった犬塚一族は、</p>	<p>(1551年) 大内氏の大内義隆が家臣の謀反により死去すると、後ろ盾を失った隆信は、竜造寺鑑兼を擁立せんと謀った家臣の土橋栄益らによって肥前を追われ、築後に逃れて、再び柳川城主の蒲池鑑盛の下に身を寄せた。 (1553年) 龍造寺隆信は、蒲池氏の援助の下に挙兵して勝利し、肥前の奪還を果たした。 その際に、蓮池の小田正光らは捕えられて処刑された。 龍造寺鑑兼は幼少であった為</p>	

時代	西暦	Ⅰ：小松地区の歴史	Ⅱ：佐賀の歴史	Ⅲ：日本の歴史
室町時代	1569年	<p>龍造寺氏が台頭するにつれ、少弐氏から龍造寺氏へと変わっていきました。問題は犬塚一族が大友配下の状態で龍造寺配下になったことです。</p> <p>当時はまだ直鳥犬塚家は、大友配下の一本でしたが、東(崎村城)西(蒲田江城)犬塚家は、大友配下にして龍造寺配下でした。</p> <p>大友軍が龍造寺討伐に動き始めます。</p> <p>東(崎村城)西(蒲田江城)犬塚家は、大友か龍造寺究極の選択を迫られます。</p> <p>東犬塚家(崎村城)は龍造寺を選び、西犬塚家(蒲田江城)は大友を選びます。</p> <p>直鳥犬塚家は元々が、大友派でしたので、犬塚鎮家(しげいえ)は西犬塚家(蒲田江城)を支持します。</p> <p>この様なこともあり、犬塚氏では、東(総領家・崎村城)と西(次男家・蒲田江城)で骨肉の争いが起きていました。総領家の座を巡る争いと言われていました。</p> <p>総領家(崎村城)では男子に恵まれず養子で繋いでいました。また、外交方針で決定的な対立がありました。</p> <p>この頃は、既に少弐氏は龍造寺隆信によって滅ぼされており、【少弐配下にして大友配下】であった犬塚一族は、少弐の滅亡と龍造寺隆信による西犬塚家(蒲田江城)への政略的な婚姻関係もあり【竜造寺配下にして大友配下】になっていました。</p> <p>つまり、龍造寺隆信が犬塚一族の争いを治める立場にあったわけです。</p> <p>しかし、龍造寺隆信は、数少ない貴重な駒である妹を西犬塚へ嫁がせてでも、本家である崎村の東犬塚よりも、分家である蒲田江の西犬塚と縁戚関係になることを重要視したのはなぜでしょうか。</p> <p>佐賀江川を西に進むと神埼郡から佐嘉郡へと入ります。佐嘉郡における河川・寄港地が龍造寺エリアである【今宿】でした。【今宿】から望むと、城原川と佐嘉江川が分岐する河川の起点となる【蒲田江】と呼ばれる土地は、当時は河川港立地条件の全てを満たす一等地で、隆信が欲しくてたまらなかったことは間違いありません。</p> <p>龍造寺隆信の姉や妹は、一族の女子の中で地位は高かったはずで、嫁ぎ先は全て政略結婚です。</p> <p>その数少ない貴重な駒を西犬塚家・蒲田江の犬塚尚重に嫁がせるとは、隆信にとって、いかに蒲田江が重要な土地であったかがい知ることができます。</p> <p>この様な状況の中で事件が発生します。</p> <p>(大友氏が龍造寺氏を攻撃した戦いの一部と思われる。)</p> <p>西犬塚(次男家・蒲田江城)の尚重は、東(総領家・崎村城)の鎮直を謀殺します。</p> <p>西犬塚(次男家・蒲田江城)の尚重も、返り討ちにあって死亡しました。</p> <p>龍造寺隆信は西犬塚の蒲田江城を攻撃します。</p> <p>西犬塚の尚重の長男は龍造寺(手を下したのは鍋島直茂)に殺され、次男・信尚(生母が龍造寺隆信の妹)は助命されました。</p> <p>後に、信尚は茂統と改めました。そして、龍造寺隆信は信尚の父・鎮直の忠死を憐れんで、旧領(三根郡)を信尚に与えます。信尚はのちに龍造寺の姓を与えられます。</p>	<p>に助命された。</p> <p>その後龍造寺隆信は勢力拡大に奔走する。</p> <p>(1559年)</p> <p>龍造寺隆信はかつての主君であった少弐氏を攻め、勢福寺城で少弐冬尚を自害に追い込んで、大名としての少弐氏を完全に滅ぼした。また、江上氏や神代氏などの肥前の諸豪族を次々と降伏させた。</p> <p>(1560年)</p> <p>龍造寺隆信は千葉胤頼を攻め滅ぼした。さらに少弐氏の旧臣の馬場氏、横岳氏などを下した。</p> <p>(1562年)</p> <p>龍造寺隆信は東肥前の支配権を確立した。</p> <p>(1563年)</p> <p>龍造寺隆信の急速な勢力拡大は、近隣の有馬氏や大村氏などの諸大名を震撼させた。</p> <p>有馬氏・大村氏の両家は、連合して東肥前に侵攻するが、隆信は千葉氏と同盟を結んで、この連合軍を撃破した。</p> <p>これにより、隆信の勢威が南肥前にも及ぶようになった。</p> <p>(1569年)</p> <p>大友宗麟自らが、大軍を率いて肥前侵攻を行うが、毛利元就が豊前に侵攻してきたため、宗麟は肥前から撤退した。</p> <p>(1570年)【今山の戦い】</p> <p>大友宗麟は毛利元就を破り、再び龍造寺隆信に戦いを臨んだ。</p> <p>宗麟は弟の大友親貞を総大将として、6万と号する大軍を組織し、肥前に侵攻させた。</p> <p>しかし、またも鍋島直茂による奇襲策によって撃退し、大友氏と有利な和睦を結ぶことに成功した。</p> <p>隆信は【今山の戦い】で勝利を収めたものの、その後も大友氏に従属した形にはなっていた。</p> <p>隆信は、周辺豪族を滅ぼし、従属させるたびに、大友氏から使者が来ていたが、結局既得権として切り取った領土は認められ、【耳川の戦い】までに確実に領土を広げ力を蓄えていった。</p>	

時代	西暦	Ⅰ：小松地区の歴史	Ⅱ：佐賀の歴史	Ⅲ：日本の歴史
安土桃山時代	1576年	<p>この時の龍造寺隆信による西犬塚家・蒲田江城の攻撃により、尚重の後嗣(あとつぎ)であった鎮家は防ぎきれず蒲田江城は鎮西出雲大社と共に焼亡した。犬塚鎮家(しげいえ)は筑後に亡命しました。</p> <p>当時は、神代しかり、犬塚しかり、筑後国人が新天地として土着するのが肥前なら、肥前国人(代表的な人は龍造寺隆信)が敗戦して亡命するしていくのは筑後でした。その筑後は鎌倉時代の頃より大友支配下にありましたので、【寄らば大樹】の大樹は大友氏というのが通説でした。肥前国人が筑前へ亡命したり、大内氏の後ろ盾を得るときは、大友氏と敵対又は謀反して、他に頼る相手がいない時だけです。</p> <p>しかし、ここからが鎮家(しげいえ)のすごいところです。</p> <p>彼は物凄い武勇の持ち主でありました。龍造寺隆信より【有馬の戦いに彼らの武勇が必要の件】ということで呼び寄せられ、筑後から肥前へ帰還します。そして、かつての西犬塚の居城・蒲田江城を再興します。</p> <p>肥前藤津郡城での戦いでは、先陣として活躍した犬塚鎮家(しげいえ)は、両弾二島(龍造寺氏配下の武勇優れた4人)の一人に数えられるほどに出世していきます。その功績により、犬塚鎮家(しげいえ)には森岳城(後の島原城)が与えられました。</p> <p>この時点で蒲田江城は廃城になりました。</p> <p>現在、蒲田江城本丸跡には、豊臣秀吉の命で鍋島直茂が建立した鎮西出雲大社が鎮座しています。</p>	<p>(1572年) 龍造寺隆信は少武政興を肥前から追放した。</p> <p>(1573年～1578年) 龍造寺隆信は ・1573年に西肥前を平定した。 ・1575年に北肥前を平定した。 ・1576年に南肥前に侵攻した。 ・1577年に大村純忠を降伏させた。 ・1578年に有馬晴信を降伏させた。 ここに、肥前の統一を完成した。</p> <p>(1578年)【耳川の戦い】 大友宗麟が【耳川の戦い】で島津氏・島津義久に大敗した。龍造寺隆信は大友氏の混乱に乗じて、大友氏の勢力圏の奪い取りに着手する。</p> <p>(1580年) 龍造寺隆信は筑前・肥後・豊前などを勢力下に置くことに成功した。</p> <p>(1578年～1581年) 肥前の統一を完成した隆信は、これを機に家督を嫡男・政治家に譲って、自らは須古城へ隠居した。しかし、政治・軍事の実権は握り続けた。 このころから、隆信の横暴さは目に余るものがあった。</p> <p>(1580年) 龍造寺隆信は、2度の亡命や竜造寺家の奪還のために援助をうけた肥後の蒲池氏・蒲池鎮連を謀殺し、柳川の蒲池鎮連の一族を皆殺しにした。 さらに人質として預かっていた肥後の赤星統家(統家の娘は柳川城の蒲池鎮連の正室)の息子と娘を殺害した。 隆信は、次第に内部の粛清を頻繁に行うようになります。</p>	<p>(1573年) ・織田信長が室町幕府を滅ぼした。</p>

時代	西暦	Ⅰ：小松地区の歴史	Ⅱ：佐賀の歴史	Ⅲ：日本の歴史
安土桃山時代			<p>龍造寺隆信は、異父弟である鍋島直茂や、四天王と讃えられた百武賢兼・成松信勝・円城寺信胤・倉町信俊らの勇猛な家臣に恵まれ、彼らの活躍で肥前から筑前・筑後・肥後に勢力を伸ばしました。</p> <p>隆信は、豊後(大分)の大友宗麟、薩摩(鹿児島)の島津義久、そして肥前(佐嘉)の龍造寺隆信と【九州三強の一角】となり、【五州二島の太守】・【肥前の熊】と称されるほどの武勇に優れた武将であった。</p> <p>しかし、隆信は武勇・知略には長じていたものの、残忍な性格も合わせ持ち、新参の武将のなかには、彼に心服していないものも少なくありませんでした。</p> <p>(1581年) 相良氏を従属させた島津氏の北上が始まります。</p> <p>(1583年) 隆信は島津氏の北上に対抗する為に嫡男の城主である政家を肥後に侵攻させ、島津軍を圧倒する兵力(北肥戦誌では37,000余)にて高瀬川(現・菊池川)を挟んで対峙したが、このときは田尻鑑種ら筑後の国人が次々と離反していた最中でもあった為、秋月種実の仲裁により、高瀬川より東南を島津領、北西を龍造寺領と定めて和睦するに至りました。</p> <p>(1584年)【沖田畷の戦い】 有馬晴信が龍造寺から離反した。これを機に島原半島における龍造寺方の諸豪族が動揺し始めたため、隆信は自ら須古の隠居城から大軍をひきいて、島津・有馬連合軍の征伐のために島原半島に赴いた。龍造寺軍は5万という大軍であり、有馬軍は5,000、島津軍はわずか3,000と圧倒的な兵力の差があった。</p> <p>龍造寺軍は、地形や戦術を巧みに利用した島津義久の弟・家久の前に大敗北を喫した。隆信自身も、島津氏の家臣・川上忠堅に討ち取られた。この戦いを【沖田畷の戦い:おきたなわてのたたかい】という。</p>	

時代	西暦	Ⅰ：小松地区の歴史	Ⅱ：佐賀の歴史	Ⅲ：日本の歴史
安土桃山時代			<p>島津家久は、少ない兵を活かす作戦として、湿地帯である沖田礮の真ん中に陣を敷き、周囲に木戸や垣根などの防塁を構築します。</p> <p>火ぶたが切って落とされ、龍造寺隆信は、これらの防塁を無視して、沖田礮を突き進んでいきます。</p> <p>龍造寺氏は大軍であるがゆえ隆信に油断を与えたようです。至近距離に近づけさせておいて、いきなり防塁に身を隠していた鉄砲隊が総攻撃を繰り返し行っています。</p> <p>ただただ、湿地帯を突き進んでいた大軍は、大混乱に陥り、その混乱の中で、隆信は、島津方の川上忠堅(ただかた)という武将に討ち取られ、命を落とします。</p> <p>実は、この日の合戦で、隆信が乗っていたのは馬ではなく、みこし(御輿)に乗っていました。隠居してからは酒におぼれ、遊興にうつつをぬかした生活で、太り過ぎて馬に乗れなかったのです。</p> <p>また、鍋島直茂を政務から遠ざけるなど、乱行が目立ったとされます。</p> <p>そんな隆信の姿は、家臣の信頼を失い、離反者も後をたたなかつたといわれています。</p> <p>尚、島津軍に討ち取られた隆信の首は、後に龍造寺家に返還されることになりましたが、鍋島直茂に返還を拒否されたといわれています。</p> <p>現在、隆信の墓所は鍋島氏と同じ佐賀県の高伝寺にあるが、戦いで討ち取られた首の行方は諸説あり、【隆信の塚】と称するものが長崎県や佐賀県内に散在しています。</p>	

時代	西暦	I : 小松地区の歴史	II : 佐賀の歴史	III : 日本の歴史
			<p>(1587年) その後、島津氏は勢力を拡大し、筑前にせまる勢いで北上します。 豊前・豊後の大友氏をのぞく九州のほとんどを島津氏は制圧しますが、豊臣秀吉の九州征伐によって、南九州に下ることになります。</p> <p>(1607年) 龍造寺氏にかわって、家臣の鍋島氏が台頭し、佐嘉藩(鍋島藩)となって、江戸時代をむかえます。</p>	<p>(1587年) ・豊臣秀吉が九州を平定した。</p> <p>(1588年) ・秀吉が、検知と刀狩りを行った。</p> <p>(1592年) ・名護屋城を築き朝鮮へ出兵した。</p> <p>(1598年) ・秀吉が死去した。</p> <p>(1600年) ・関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利した。</p> <p>(1601年) ・徳川譜代の家臣を要地に配置した。</p>
江戸時代		<p>・農地として現在へ</p> 	<p>(1611年) ・佐嘉城(鍋島氏)が完成した。</p> <p>(1615年) ・成富兵庫茂安の水利工事がはじまった。</p> <p>(1644年) ・小城・蓮池・鹿島の領主が大名になった。</p> <p>(1716年) ・【葉隠】ができあがった。</p> <p>(1748年) ・鍋島家のお家騒動があった。</p> <p>(1782年) ・佐嘉藩校の弘道館が開かれた。</p> <p>(1852年) ・佐嘉藩国産方に精練方を造り反射炉も完成した。</p> <p>(1858年) ・三重津に船手所を造り、オランダから電流丸を買った。</p> <p>(1859年) ・精練方で火薬の製造をはじめた。</p> <p>(1865年) ・三重津造船所で凌風丸を完成させた。</p> <p>(1868年) ・佐嘉藩の阿姆斯特朗砲が上野で活躍した。</p>	<p>(1603年) ・徳川家康が江戸幕府を開いた。</p> <p>(1612年) ・キリスト教の禁圧が始まった。</p> <p>(1615年) ・幕府が大阪城の豊臣氏をほろぼし、大名・朝廷・神社・寺院をとりしめる規則をつかった。</p> <p>(1635年) ・外様大名の参勤交代制度が定まった。</p> <p>(1639年) ・鎖国が行われた。</p> <p>(1702年) ・赤穂浪士の討ち入りがあった。</p> <p>(1808年) ・イギリスのフェートン号事件が長崎であった。</p> <p>(1821年) ・伊能忠敬の日本地図が完成した。</p> <p>(1853年) ・アメリカのペリー艦隊が浦賀にきた。</p> <p>(1866年) ・薩長が同盟して倒幕の兵をあげた。</p> <p>(1868年) ・戊辰戦争がはじまった。</p>
明治時代			<p>(1869年) ・鍋島直正と島義勇が北海道開拓使となった。</p> <p>(1874年) ・佐賀の乱がおきた。江藤新平や島義勇が処刑された。</p> <p>(1889年) ・佐賀が市になり、市会が開かれた。</p>	<p>(1871年) ・廃藩置県が行われた。</p> <p>(1872年) ・学校制度がきまった。</p> <p>(1894年) ・日清戦争がはじまった。</p> <p>(1902年) ・日英同盟が結ばれた。</p> <p>(1904年) ・日露戦争がはじまった。</p>